The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「字鏡」諸本の基礎的研究
Author(s)	中野, 直樹
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69697
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　中野　直樹　）	
論文題名	「字鏡」諸本の基礎的研究

論文内容の要旨

本研究は、鎌倉初期以降に成立した「字鏡」諸本について、典拠および、成立の事情を明らかにした研究である。本論文のタイトルにある「字鏡」諸本とは、『新撰字鏡』を含め、『字鏡抄無名字書』・『字鏡』・『字鏡鈔（抄）』『字鏡集』諸本をまとめて指した呼称である。

「字鏡」諸本は、各本によって本文・注文の体裁の独自色が強いことが特徴であり、なおかつその分量は膨大である。この中には、本邦辞書史上・国語史上重要なものも多く含まれており、重要な位置を占める字書であることは言うまでも無い。本論文では、「字鏡」諸本のうち、『字鏡抄無名字書』・天文本『字鏡鈔』・五巻本『字鏡』の三本を取り上げ、文献学的手法を用いて考察を行い、明らかになったことを示した。

本研究が目的とするところは、「字鏡」諸本の本文・注文の典拠を明らかにするということは勿論のこと、編者が先行書をいかに利用し、本文を構築していったのかという点を明らかにすることである。これまで、古辞書研究は諸本系統の検討や、先行書との関係などを明らかにすることに重点を置き、成果を蓄積してきたが、なぜその先行書が引用されたのか、どのようにその本が引かれているのかという点を問うことはあまりなかった。

本研究では上記の観点から「字鏡」諸本がどの本をどのように引用しているのかを明らかにし、「字鏡」諸本の本文研究を前進させるとともに、「字鏡」諸本に引用された書が、どのような役割を果たしたものであったのかという点についても考察を行った。

また、先学の諸研究で示されているように、辞書研究は国語史の様々な分野に貢献できる。特に「字鏡」諸本は掲出字の漢字に対して、音・訓・異体字等の注を付しており、「字鏡」諸本が成立した時代における漢字の理解を示すもので、国語資料として有用である。

しかしながら、これも先学が示したように、辞書がいつ成立し、本文がどのような性格を持ち、どのような表記をされ、どこからの出典であるのか、また、作り手と受け手はどのように辞書を用いたのか、誤写等は無いのかを明らかにしなければ、その本文に記載された情報の意味は正確には分からないのである。上記の諸点を明らかにするために、古辞書の本文研究が必要になる。

以下、本論文の内容について要約する。序章では、本研究の目的について述べた。また、「字鏡」諸本についての先行研究を概観し、現在の「字鏡」研究の水準を示した。

第一章では、「字鏡」諸本と切韻系韻書との関係について、京都大学大学院文学研究科図書館蔵『字鏡抄無名字書』を用いて考察した。「字鏡」諸本はいずれも音を反切・直音注・仮名音注いずれかの形式で示している。

音を示すにあたって、『字鏡抄無名字書』の編者が重用したのは『切韻』であった。『字鏡抄無名字書』の反切および漢文注は、これまで典拠不明（切韻系韻書かとはされてきた）であったが、『東宮切韻』が引用されていることを指摘し、さらに、『東宮切韻』が韻書的用途として用いられていることも述べた。

また、極僅かな例にとどまっているが、「無名字書」の漢文注には、『玉篇』・玄応撰「一切経音義」と同じ注文が見られることも明らかにした。このことは、『新撰字鏡』にも同様の例があり、「字鏡」諸本の注文の作成方法のあり方として重要なことであることを指摘した。

第二章では、「字鏡」諸本と字書との関係について、前田育徳会尊経閣文庫蔵天文本『字鏡鈔』を用いて考察した。先行研究では既に本文・注文の増補に改編本系『類聚名義抄』・『玉篇』が用いられていることは明らかにされていたが、合点が付された本文の典拠は明らかでなかった。この章では、その典拠がこれまでに増補に用いられていると指摘されていた改編本系『類聚名義抄』・『玉篇』と同じであった可能性を指摘し、さらに、韻書の本文に字書で増補を行うという本文改編の意義について述べた。韻書が字書を取り込んで本文・注文を充実させるという増補のあり方は唐土にも見え、注目されることも述べた。また、『字鏡鈔』の編者が本文のうち、どの部分を重視して全体の本文を作成したのかについても、注文の特徴から考察を行った。

また、本章の最後では、『字鏡鈔』乙部のような韻順に本文配列をした書が、何のための書だったのかということについても考察を行った。本邦における『切韻』をはじめとする韻書は詩作のためだけではなく経書・仏書に対する注釈のためなど、音訓を参照するために用いられていることも多い。とすれば、韻書を改編した『字鏡鈔』も同じ役割をになっていたとしてもおかしくはない。字書として用いられもしたからこそ、『字鏡鈔（抄）』・『字鏡集』諸本に韻順よりも分かりやすい字形配列の本が生じたと考えた。

第三章では、「字鏡」諸本が本邦撰述の字書のうち、特に後代への影響がどのようなものであったのかについて大和文華館蔵五巻本『字鏡』を用いて考察した。この本については、先行研究によって本文の典拠は殆ど明らかにされているが、この本が成立した事情等については、先行研究にて単に偽作意識によるものかとされたのみであった。

本章では、未だ典拠が明らかにされていない箇所についても考察を行い、本文のすべての典拠が世尊寺本『字鏡』と関係する書であったことを明らかにした。さらに、近世期における「字鏡」諸本や「和玉篇」の扱いを踏まえ、本書には意図的な編集があった可能性について指摘した。

以上が本論文で明らかにしたことである。序章で述べた通り、先行研究で不明とされた本文の典拠を明らかにしつつ、引用された書がどのように使われているのか、またその書が引用されたのはどうしてなのかにも踏み込んだ。

終章では、本論文で明らかにしたことをまとめ、「字鏡」諸本に残されている課題について述べた。課題には、大きく三つあることを指摘した。一つ目は、先行研究で未だ明らかにされていない「字鏡」諸本の典拠の特定と注文の特徴の検討である。「字鏡」の本文にはまだまだ多くの典拠不明の本文・注文が存している。これらの具体的な典拠の解明が課題である。

「字鏡」諸本はいずれも先行書の用い方が異なっている上に、本文や注文も同じ系統の本であっても変遷している。この変遷が一体何を意味しているのかについては今後なお検討の余地がある。また、未だ取り挙げられていない「字鏡」諸本は各所に蔵されており、すでに明らかにされてきた諸本系統のうち、どこに組み入れられるのかを考えることも重要である。

二つ目は「字鏡」諸本が何のために作成されたのかという成立事情を明らかにしていくことである。現在のところ、『新撰字鏡』のみ、その序文から若干の作成意図をうかがい知ることができるが、実際にどのような人物・集団がどのように用いたのかはっきりしていない。『字鏡』・『字鏡鈔（抄）』・『字鏡集』については、作成意図・編者・使用者など不明のままである。これを明らかにするためには、「字鏡」諸本の本文の検討だけでなく、同時代の文化的背景や、内典外典を問わず諸典籍との関係について見ていかなければならない。このため、先行研究によって明らかにされている典拠となった書についても、どこに、どのような態度で引用されているかなどの再調査が必要である。

三つ目の課題には校本・索引の作成が挙げられる。「字鏡」諸本を言語研究や文学研究に用いるためには校本と和訓・字音索引の作成が必要になる。現在のところ、『新撰字鏡』については山田孝雄氏による校訂が存するが、『字鏡抄無名字書』・『字鏡』・『字鏡鈔（抄）』・『字鏡集』については、索引も乏しく、本文校訂も殆どなされていない。「字鏡」諸本の本文・注文はいずれも貴重な言語資料となりうる。

稿末には資料編として、『字鏡抄無名字書』と『東宮切韻』との反切・漢文注対校表、『字鏡抄無名字書』の反切一覧表、大和文華館蔵『字鏡』典拠不明箇所の和訓索引を付した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　中野直樹　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	岡島昭浩
	副 査	大阪大学　教授	金水　敏
	副 査	大阪大学　准教授	岸本恵実

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　「字鏡」諸本の基礎的研究

学位申請者　　中野直樹

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　岡島昭浩

副査　大阪大学教授　　金水　敏

副査　大阪大学准教授　岸本恵実

【論文内容の要旨】

本論文は、鎌倉時代に成立したと考えられている漢字辞書『字鏡』およびその系統に連なる諸本について考察したものである。「字鏡」と呼ばれる漢字辞書群が平安時代の『新撰字鏡』を含めて多数あるが、本論文では、それらを包括して「字鏡諸本」と呼んで考察することで、日本における漢字辞書のもつ様々な特徴を探っている。字鏡諸本は、各本によって本文・注文の体裁の独自色が強いことが特徴で、多くの本文・注文を有している。これらに見える言語事象を適切に扱うための研究という意味で「基礎的研究」としている。「序章」「第一章：切韻系韻書との関係」「第二章：字書との関係」「第三章：本邦撰述の字書との関係」「終章」からなり、ほかに、資料編として三種の表が附されている。

「第一章：切韻系韻書との関係」では、「字鏡」諸本のうち、「無名字書」と名付けられている京都大学蔵の字書が、中国の韻書である『切韻』をどのように取り入れているかという点から、この字書の成立事情を論じている。日本の字書が中国の韻書を取り入れるにおいて重要なこととして、字音の表示法である「反切」をどのような字書からどのように取り入れているか、ということが重要であり、それを調べることは、辞典の成立事情を調べるのに不可欠である。しかし、中国に於いても日本に於いても、韻書に限らず字書というものは、常に改訂がなされ、かつ改訂前のものは姿を消してしまうのが常である。従って、「無名字書」が成立した当時の韻書類が、そのまま現在残っているということはなく、その考証作業は困難を窮める。たまたま部分的に残されたものと比較することによって、「無名字書」に載せられている反切は、随から唐代初期ごろの原本切韻に近いと考えられている「切韻三」と呼ばれているものの反切に近いことを明らかにしている。さらに、それは、日本で撰述された『東宮切韻』（逸書）に載せられた反切を引用したことによって、そのようなことになったことをも、断片的に残る『東宮切韻』の逸文との比較考証を行うことで明らかにした。

「第二章：字書との関係」では、韻書ではない辞書をどのように取り入れているのかを探るために、中国の辞書である『玉篇』、さらに日本における先行辞書である『類聚名義抄』と、天文本『字鏡抄』を比較することにより論じている。韻書である『広韻』にない漢字を、非韻書からどのように増補したのかを明らかにしようとしたものである。

第三章では、『字鏡』よりも後に出来た辞書に『字鏡』がどのように取り入れられているのか、という問題を、

「五巻本字鏡」と呼ばれる近世期の写本を分析することで論じている。この「五巻本字鏡」と呼ばれる本の性格付けを行うこと、またこのような辞典が「字鏡」という名称で呼ばれることになった理由を考えることで、「字鏡」とされる本の性格を考えようとしたもので、偽書として無視するのでなく、再編の意図を探るべきであると主張している。

【論文審査の結果の要旨】

古辞書の系統を探る研究は、見通しを付ける力と、その見通しを裏づけるために徹底的に調査してその証拠を集めるための緻密さの両方が要求されるものである。本論文ではそれに挑み、かなりの成果を挙げていると言える。第一章における、無名字書に載せられた反切と切韻系韻書に載る反切との比較は、地道な作業を経て立論されたことが見てとれ、説得力のある論となっている。

第二章において天文本字鏡の構成を考えたものも、かなり面倒な手続きを経て書かれた部分である。出発点は、先学により指摘されていた、この字書の「乙部」と呼ばれる部分についての考察であるが、複数の先行辞書を比較対照しながら新しい辞書を作成していった過程を探ろうという研究で、全貌が明らかになったわけではないが、広韻（に近い韻書）、宋本玉篇（に近い本）、類聚名義抄を参照しながら作っていった様子を、或る程度示すことが出来ている。

ただ、第三章の五巻本字鏡についての研究は、まだ不足している部分が多い。五巻本字鏡の諸本のうち、まだ一本しか見ていないことや、方言事象と指摘しているのが、単なる音訛であったり、中央語にも用例のある音訛であったりするなど、問題が残っている。今後、調査を広げ、かつ深めて行って欲しいものである。また一方で、「倭玉篇」と呼ばれる漢字辞書類との関係も浮かび上がってきて、「「字鏡」諸本」と呼ぶ本の性格付けの困難さを示すことにもなった。

全体的にも、「「字鏡」諸本」と言いながら、その指す範囲が不分明で、平安期の『新撰字鏡』から江戸期のものまで、「字鏡」と名付けられているもの、というだけのことでは、他の字書類との関係が見えてこず、第三章で触れられた「倭玉篇」との違いや関連をどのように考えているのかも示されていないのは残念である。

とはいえ本論文は、「無名字書」や天文本『字鏡抄』の位置づけを行った点などにおいて優れており、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。